

魏志倭人伝の道里の真実

-燕王の用いた短里-

水野 健一

はじめに

邪馬台国論争は日本の優秀な人々が長い間取り組んでいます。現在に至っても決定的と言える結論は出ていません。常識で考えてそんなことがありうるのでしょうか。おそらく今のままでは永遠に決着がつかないように思えます。この現状を打破するには今までとは違った視点が必要であると思われまます。

今回倭人伝解読にあたって新たな気づきが得られたので報告します。

魏志倭人伝は正確か？

巷でよく聞くのが、「魏志倭人伝は正確だから原文を勝手に修正してはいけない」派と「魏志倭人伝は司馬氏に阿っているから内容は誇張して書かれている」派の対立です。しかし私の立場から見るとどちらも解釈が平面的であるように感じます。魏志倭人伝の意味を正確にとらえるためにはこの文はいくつかの文がつなぎ合わさってできているという視点で読んでいかなければなりません。このことは中国人の陳長崎教授が「倭人伝はいくつかの時代の資料が融合している」とおっしゃることからもわかります。

魏志倭人伝はまずその構造に注目し、今自分が読んでいる文はどの時代に書かれた文献からの引用なのかを常に意識して解読していかないと本当の姿は見えてこないのです。

魏志倭人伝本文中の短里への疑問

魏志倭人伝の中で使われている里数は魏の用いている一里(約 434 メートル)ではないことが研究者のなかでは常識です。私も素直に短里で読んでいたのですが厳密に里数を現代の地図に当てはめようとするとうまくいかないところが出てきます。それが「東南至奴国百里」以降の部分です。百里は短里で約 8km なので伊都国の候補である三雲井原遺跡から探すと近すぎるのです。一般的な直線読みだとその後も「東行至不彌国百里」これでは 16km に満たない範囲に二万余戸が収まらないといけません。これはさすがにおかしいと思いました。

では本当はどういうことなのか、それは陳教授の資料融合論で考えるのです。

私は元々伊都国までの記述と奴国以降の記述は別の文献からの引用であるとの考えでした。よって里数も短里と長里をそれぞれに用いることにしました。「東南奴国百里」以降は長里とするのです。そうするとなにが導かれるか、この部分は長里なので魏の使者が倭国に行ったときの復命書の抜粋であると仮定できます。おそらく印綬の際の梯儻の情報でしょう。

では伊都国までの短里の部分は誰の報告書か？当然短里なので魏の使者ではありません。そんな者がいるのでしょうか？うまい具合にいそうなのです。燕王公孫淵の命で韓と倭を訪れた帯方郡の使者です。元々帯方郡は公孫氏が設置した郡です。そして公孫淵の時代に燕王を自称し魏から独立しています。そのときに魏との差別化をはかるために短里を採用したのではないのでしょうか。そして公孫淵は属国となった韓と倭の支配を堅固なものにするため使者を派遣し調査の記録を帯方郡に残したのです。

帯方郡はその後魏に奪われ、その資料も魏の都へ送られ当時の中国人には未知の倭人を知るための手がかりとなったのです。

陳寿は三国志を作成するにあたり、自分が訪れたことがない東夷について記述するときにそれらの資料を利用したでしょう。しかしその旅程が短里で書かれていることには気づくことはできなかったはずです。われわれのように朝鮮半島の大きさを知った上で書かれている里数を求めるという手法が使えないからです。陳寿にとっては朝鮮半島は長里で方可四千里のとても大きな大陸でした。またそこから倭国への行程も同様です。このことは陳寿の記述、「計其道里 當在会稽東冶之東」にあらわれています。郡から長里で万二千里にある女王国は中国大陸内で計るとかなり南方まで行ってしまいます。それが会稽東冶之東という表現になったのでしょう。この部分は精巧な地図が簡単に手に入る現代人の感覚で捉えてはいけなかったのです。海すら見たことがなかったであろう陳寿の目線に立って考えるべきでした。

よってこの部分は陳寿の間違った理解から記されている以上 倭国、そして邪馬台国の場所を突き止めるための参考にはならないということです。

卑弥呼がいたのは伊都国

伊都国までの記述とそれ以降で文献が違うと考えていますがその理由は卑弥呼は伊都国に常駐していてそこまでの道程が倭人伝の最重要部分だからです。

これは中国語の「到」と「至」の意味の違いから決定しています。この使い分けは台湾人の学者張明澄先生の著作で学ぶことができます。

「到」と「至」は漢字の三大要素である形(字の形態)、音(字の発音)、義(字の意味)が全て違います。しかし日本語で読むと両方の字とも「イタル」と訳されてしまうので同じ字と誤解されてしまいます。しかし英訳してみると「到」は reach または arrive to、「至」は till または untill と違いがわかりやすくなります。「到」の字はそこが終点で先には行かないという意味ですが、倭人伝には「到」が用いられている国が二つあります。半島南部の狗邪とこの伊都国です。同じ旅程で終点が二つあるのはおかしいじゃないかと思われるかもしれませんが、これらはもともと別文献でした。漢の楽浪郡の官は半島南部やその東南の海の中に倭人という部族がいることを知り段階的に調査を進めました。まずはいきなり海を渡るような危険を冒すことなく陸伝いで行ける倭の北岸狗邪へ何度か行き、情報を蓄積します。そして次に山島と表現されている対海国へ度りました。対海国から一支国へも瀚海に邪魔をされてすぐには渡れなかったと思います。その理由が「度」と「渡」の字の違いです。これらは同じ文の中での文字の使い分けでは無くして別の時代の文章を陳寿が正確に引用した証拠だと今は考えています。

帯方郡からの使者は舟で出発し、各地を經由し、末廬国に着き、最終目的地の伊都国に陸行で向かいました。当時の主要な移動手段、舟を極力使い、最後は陸行しました。とてもシンプルな流れです。そして倭国王に会えばそこから先は行く必要はありません。参考としてその先はどうなっているか調べるくらいでしょう。倭人伝はいろいろな文献の集合体なので燕が調査した部分と魏が調査した部分が混在しているようです。それが奴国の重複です。陳寿ができるだけ多くの情報を詰め込もうとしたためにとても誤読しやすい文章になってしまいました。

邪馬台国はどこか？

邪馬台国はどこかを考える前にまずなぜ邪馬台国の場所を突き止める必要があるのか、苦勞して場所を特定する価値のある国なのかを考えてみたいです。

なにをいまさら当たり前のことを、と思うかもしれませんが当たり前のことを当たり前のままでより深く掘り下げてこなかったことが今の現状とも考えられます。

「女王之所都」ここをどう考えるか

倭人伝の構造は上記で述べたように伊都国までとそれ以降で別の人物が書いた文献からの引用であろうことが予想されます。

魏の使者梯儁は何を伝えたかったのか、卑弥呼がいるところは水行十日陸行一月の遠絶な国ということなののでしょうか？

今までこの女王とは卑弥呼のことだと考えられて研究が進められてきました。それにはとくに異論はありません。しかし決定的な解答がまだみつからない現状、この女王とは「卑弥呼之所都」でないかぎり別の女性の可能性もあるとすることも可能ではないでしょうか。記紀にもあるように昔の日本には女性首長が各地にいました。女王=卑弥呼の常識を一度取り払ってもよいのではないのでしょうか。

その視点に立つと邪馬台国とは倭人伝の中で一度だけ出てくる重要度のかなり低い国に格下げになってしまいます。魏の使者も訪れていない以上魏からの下賜品の情報もゼロです。考古学的アプローチからの場所の特定も不可能になってしまいました。こうなると別にわざわざ場所を突き止めなくてもよいような気すらしてきます。

それでも場所がわからないままにしておくのは嫌だという人のために私の一見解として考えてみましょう。

卑弥呼は伊都国にいて魏の使者はそこで印綬をすませ魏の皇帝からの仕事は完了しました。そして最終目的地である伊都国でその先の国について情報を収集します。

「東南至奴国 から 南至邪馬台国 可七万余戸」までは長里で書かれているのでその記述です。この部分は伊都国で仕入れた情報なので自分の存在は伊都国に置き、そこから各国を遠目に見る感じで読まなければなりません。

東南至奴國百里

「東南の方向には奴国がある。距離は百里ほどであろうか。」

ここからは方角 国名 距離の順に変わっていますがこれは張先生がおっしゃるには仮定の意味を表すそうです。魏の使者は現地まで行っていないことがここからもわかります。

東行至不彌國百里

「東の方角には不彌国がある。距離は百里ほどであろうか。」

ここでのポイントは東に“行”という動きを表す漢字が付け足されていることです。奴国は単純に伊都国からの行程ですが、ここで“行”を付けることによって自分の基準点が不彌国に移動します。よってこれ以降に現れる国は不彌国が出発点に変わります。不彌国は伊都国から、その後の国は不彌国からの行程が書かれているということです。

南至投馬國水行二十日

「南の方角には投馬国がある。不彌国から舟で出発して二十日もあれば着くところにある。」

まず奴国、不彌国という順番を考えましょう。奴国は内陸にあるので先に記します。次に投馬国と邪馬台国は海路を行くので海に面した国が出発点になります。その国が不彌国です。音からの連想ですが不彌国は海国もしくは近江国と呼ばれていたのではないのでしょうか？。投馬国は水行のみなのもし陸行するととても時間のかかるところにあるのではないのでしょうか。また二十日という日数も二十日間全て移動した先にあるというのではなく、天候不良で待機している場合も考慮して余裕を持った数字であると考えるのが現実的な考察だと思います。ではどこかと言われると宮崎の可能性もありますし、殺馬の誤字と考えて鹿児島の可能性もあります。これは情報が少なすぎてなんとも言えないところです。

南至邪馬台國女王之所都水行十日陸行一月

「南の方角には女性が首長をつとめている邪馬台国があるが不彌国から水行で十日もあれば着くところにある。また水行では遠回りなので陸行の選択肢もあるがその場合は一月くらいは念のためみておいたほうがよい。」

水行十日陸行一月はいろいろな意見がありますが、今までは細かく行程ごとに国の名前を記していたのに邪馬台国では水行十日で着く地点の情報が全くないのはやはり不自然です。ここは並列の旅程の意味と考えたほうが良いと思われます。

邪馬台国の場所を細かく特定するには如何せん情報が少なすぎます。今まで頼りにされていた銅鏡等の下賜品も魏の使者が邪馬台国まで行っていないとなるともう参

考にできません。不彌国であろう博多湾沿岸から舟で行くと遠回りになる場所というと有明海の東岸のどこかではないか、このくらいの考察が限界です。
結果的にはみやま市あたりから熊本市の辺りではないかという仮説を後押しするような感じです。

おわりに

解答としては九州説ですが倭人伝を詳細に読み解くとういう結論に達します。

「卑弥呼のいる邪馬台国」は倭人伝を読む人それぞれの心の中にある国です。

九州、畿内、四国、北陸、どこに比定しようとその過程はとても楽しいものです。

日本人は陳寿に感謝してもいいのかもしれませんが。

不完全で難解な我が国に関する文章を解説する機会を与えてくれたことを。

参考文献

張明澄 「誤読だらけの邪馬台国」

上野武 「女王卑弥呼の都する所」

野上道男 「魏志倭人伝・卑弥呼・日本書紀をつなぐ糸」